

2 講師の緊張と演出の関係に関する実験

——仮説の検証——

第1章 実験の概要

仁 科 エ ミ

1. 実験のねらい

講座番組における講師の過度の緊張をやわらげるためには、制作者側として何ができるか、私たちは第1部で紹介したように9つのアイデアを出した。これらは、長年講座番組の制作に関わってきた経験から生まれた仮説である。

このような工夫を凝らすことで、講師の緊張が実際にやわらぐのだろうか。これを検証することが今回の実験のねらいである。

諸般の事情から、9つのアイデアのうち、実際に比較実験を実施したのは、次の6項目である。

表1.1 実験実施項目

実験項目	通常方式	講師の緊張をやわらげると期待される方式（仮説）
基本セット	座りセット (座って講義する)	白板前立ちセット (白板前に立って講義する)
図表・写真等 (パターン)	紙芝居方式 (重ねておく)	美術館方式 (全て白板にはりつけておく)
V T R 操作	スタートボタンを ディレクターが操作	スタートボタンを講師自身が操作
次画面表示装置	使用しない	使用する
制作担当者	副調整室で指揮をとる	フロアで指揮をとる
時間管理	45分通し収録	中断をはさんだ収録 (終了近くで一時停止)

2. 評価指標の選定

前章で検討した講師の過度の緊張や負担をやわらげるための演出上の工夫について、それらが本当に講師への負担の軽減につながっているかどうかをなんらかの方法で評価する必要がある。

その方法のひとつとして、収録終了後の講師へのヒアリング調査による主観的評価手法が考えられる。これによって、演出上の工夫の効果について、およその傾向をとらえることは可能かもしれない。しかし、どのような場面で緊張したかを講師が収録後まで綿密に記憶しているとはかぎらないうえ、講師自身がみずからの緊張状態を的確に意識し、言語を介して表現・伝達できるという保障もない。

そこで、このような講師自身によって意識できる影響だけでなく、意識できない領域での影響もリアルタイムに把握できる生理学的な手法によって、番組収録中の講師の緊張の度合いを定量的に把握することができないかどうかを検討した。

緊張状態を反映する生理学的指標としては、表1. 2のようにさまざまな指標が知られている。しかし、この研究でもちいる生理学的指標は、講座番組の本番収録時に計測をおこなうため、以下のような条件をそなえていなければならない。

- ①緊張状態を比較的過度特性よく反映するものであること
- ②講師に装着するセンサーやケーブル類がテレビカメラに映らないこと（そのため、頭部をはじめ、めだつところにセンサーをつけなければならない脳波や眼球運動は対象外となる。）
- ③センサーの装着によって講師に負担が生じないこと
- ④無線方式による遠隔計測が可能であること

などである。以上の条件をみたす生理学的指標として、私たちは「心拍」に着目した。心拍は、交感神経の緊張によって速くなることが知られており、緊張や不安を反映する指標とされているからである¹⁾。しかも過度特性がよく、小さなセンサーをもちいた遠隔計測が可能である。

そこで、同一講師による番組2回分の収録が設定されている収録日を選び、そのうちの1回には演出上の工夫を加え、もう1回は通常の演出による収録をおこなうことにした。収録後に、講師から新演出法についての評価を聞き取り調査するとともに、番組収録中の講師がどのような時に緊張するかを、講師への負担を心拍を指標として生理学的に把握する手法の開発を試みた。

1) 日本自律神経学会編：自律神経機能検査（第2版）文光堂、1995.

表1. 2 緊張を指標とする生理学的指標とこの研究との適合性

	呼吸	心拍	血圧	唾液中 コルチゾル	内分泌系 ホルモン濃度	血中の好酸球・ 好塩基球	容積脈波	発汗	皮膚電気反応	節電図	眼球運動	脳波
番組収録を中断せずに計測可能	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○
発話にともなうノイズの混入が 少ない	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
装着するセンサー類がTV カメラに映らない	○	○	○	-	-	-	△	△	△	△	×	×
ケーブルがカメラに映らない (無線計測可能)	○	○	○	-	-	-	△	△	△	○	○	○
緊張状態を過度特性よく反映 する	○	○	○	×	×	×	○	×	○	○	○	○
センサー類装着による講師の負担 が少ない	○	○	×	△	×	×	○	○	○	○	○	○

3. 対象番組と評価対象項目

同一講師によって一日に2回の番組収録がおこなわれる収録日に実験を設定し、13日26回の番組収録時に心拍の計測実験をおこなった。ただし、そのうちの5回については、共演する2名の講師について計測をおこない、また同一講師について計測する機会が複数回あったので、最終的には、11名の講師を被験者とする36回分の講座番組収録時のデータが得られた。

それぞれの収録日ごとに、評価対象とする演出上の工夫をひとつだけ設定した。